

9.11 後のインドネシア映画が描くイスラム像

西芳実

2001年9月11日の米国同時多発テロは、国境を越えるテロの脅威を人びとに実感させると同時に、イスラム教と暴力・テロを結びつける見方を強化した。これは、イスラム教徒が多数居住しているにもかかわらず、中東を中心とするイスラム世界像の周縁部に位置づけられ、中東と切り離して理解されてきたインドネシアにおいても例外ではなかった。翌年10月のバリ島爆弾テロ事件は、インドネシアのイスラム教徒が世界を舞台にしたテロの加害者にも犠牲者にもなることを意味したからである。このことは、インドネシアのイスラムを地域固有の文脈の中だけでなく、世界の文脈の中に位置づけ、世界に対し説明することが求められる状況になったことを意味していた。

ここでは、こうした状況にインドネシア社会がどのように対応しようとしているかを、事件後に製作された2つのインドネシア映画を見ることで考えたい。1つは、バリ島爆弾テロ事件を題材に2006年に製作された「楽園への長き道(Long Road to Heaven)」、もう一つはエジプトで学ぶインドネシア人青年を主人公に2008年に公開され、観客動員数380万人のメガ・ヒットとなった「愛の徴(Ayat-Ayat Cinta)」である。

*

「楽園への長き道」は、「チャ・バウ・カン(Ca Bau Kan)」や「アリサン(Arisan!)」、「夫を分かち合う(Berbagi Suami)」などの話題作を監督し、インドネシア映画の新世代

を代表するニア・ディナタがプロデューサーとなり、ジャカルタの映画製作会社カルヤナ・シラ・フィルム(Kalyana Shira Films)とノン・フィクション番組を専門とする国際テレビ製作会社(Tele Productions International、米国ワシントン州)の協力で製作された。主要な登場人物の国籍はインドネシア・マレーシア・米国・オーストラリアで、それぞれインドネシア語(マレーシア語)・英語を話して字幕をつける形がとられた。ジャカルタで2007年1月に封切られたほか、2007年クアラルンプール国際映画祭に出品された。

物語は、バリ島爆弾テロ事件が企画・実行され、実行犯が裁かれるまでを4つの異なる場と視点(①テロを企画する人びと、②テロを実行する人びと、③テロを受けて現場で対応を迫られる人々、④テロを報じる人びと)から描く構成がとられ、それぞれに対応して、事件をめぐる4つの問い(①なぜバリ島がターゲットに選ばれたのか、②なぜ天国への道がテロになるのか、③親しい人をテロで失うことをどう受け止めればよいか、④「微笑むテロリスト」を裁けるのか)を考えさせる仕組みとなっている。

テロを引き起こす側の物語は第1の視点と第2の視点に分けられ、テロの背景や動機の重層性が示されている。たとえば、「アラブの同胞」の信頼を失わないようシンガポールの米国戦艦を狙うべきとするハンバリに対し、ムクラスが重視するのは、イスラム急

進派に対する当局の取り締まりが強化され、アルカイダの支援を期待しにくい 9.11 以後の東南アジアで組織の求心力を高めることであり、ただちに必ず実行できるターゲットとしてバリでの実施を主張する。幹部間の激しい議論は自分の力を認めさせるためのものとして描かれ、バリが選ばれるのは「ゴミを自分の庭に捨てる人はいない」から（自分たちが痛みを覚えない場所だから）とされる。

他方、現場では、テロの準備を進めるアムロジが、テロの実施と天国への道が繋がっていることを確信し、迷いがない。共に準備を進めるイムロンがテロによるイスラム教徒の犠牲や孤児の増加を懸念すると、「イスラム教徒としての尊い犠牲」であり「米国こそアフガニスタンで孤児をつくった」と諭す。映画は、周囲に評価されないことへの不満を抱え、敬愛するムクラスの評価を気にするアムロジの姿を同時に描くことで、アムロジにとってのイスラム教の意味を観客に考えさせる。また、機転やまじめさといった「よい資質」を備えた信心深いイスラム教徒であるイムロンが、その資質ゆえにテロ実施の障害を切り抜け、結果としてテロの実現を後押しする様を描き、「イスラム教徒として善良」であることの意味を考えさせる。

*

第3の視点は、9.11 テロで恋人が犠牲となったものの遺体確認ができず、その事実を受け止めきれぬまま、恋人が愛したバリ島で長期滞在中に、爆弾テロに遭遇した米国人キリスト教徒ハンナを中心に進行する。名も知れず死んでいく犠牲者の姿にやり場のない怒りを抱えたハンナは、自分と同じネックレス

を身につけた遺体の身元を探しながら救援活動に参加する。最初は「なぜあなたたちは私たちを殺すのか」とインドネシア人医師ハジ・イスマイルに詰め寄ったハンナだったが、イスラム教徒による手当てを拒む白人や、外国人観光客の手当てを優先させる病院を嘆くインドネシア人、「平和なバリに米国人とイスラム教徒が戦争をもちこんだ」と憤るバリ人、テロの犠牲者を宗教・国籍の区別なく助けるハジ・イスマイルらの姿を見るうちに、犠牲者たちはイスラム教徒ではなくテロリストに殺されたことを理解する。捜していた遺体の身元は判明し、これを弔うことを通じて、9.11 以来のハンナのわだかまりも解ける。

第4の視点では、テロ実行犯アムロジの公判取材のためバリ島を訪れたオーストラリア人女性記者リズが描かれる。タクシー運転手ワヤンを運転手兼通訳として雇ったリズは「悲しみと怒りを抱えた犠牲者」を探して街に出るが、「外国人は楽園好き。事件で一時失業したが、ホテルができて職を得た」といった感想しか得られない。リズは「自分は同国人の犠牲に怒りを感じるのにバリの人はなぜ怒らないのか」と苛立ち、ワヤンに「知り合いに犠牲者はいないか」と詰め寄る。ワヤンは弟をテロで失っていたが、リズの問いには「いない」と答え、「弟は平安の中にいる」と言い切る。公判ではアムロジに死刑判決が下るが、「微笑むテロリスト」アムロジは意気軒昂で、ここでもリズの期待は裏切られる。そのときリズは、アムロジを囲み写真撮影をして騒ぐ記者たちの中にいる自分を見るワヤンの視線に気づき、アムロジの微笑を支えているのがほかならぬ自分たちであ

ることを理解する。

ここでは、なぜこんな目にあうのかという問いにただちに答えを出そうとする態度が暴力の原因を宗教や民族の違いに帰し、結果として理不尽な恨みを増幅させていることや、憎しみを向けることがテロリストを注目させ、喜ばせるという構造が明確に示されている。これに対して、ワヤンやハジ・イスマイルの姿を通して、誰かを責めるのではなく、理不尽な思いを自分で引き受け他者に尽くすことで前向きに生きるあり方が恨みの連鎖をとめる可能性が示唆され、宗教はそのようなあり方を支えるものであって、その道は長く険しいが、近道はないとのメッセージが読み取れる。また、イスラム教をテロや暴力と同一視する外部社会からのまなざしこそが、テロや暴力をイスラム教の名の下に正当化する行為を支えていることが示唆されている。物語のなかで成長を遂げるのが米国人女性とオーストラリア人記者という「外部者」であることは、この映画が外部のまなざしの変容を強く求めていることの表れと思われる。

*

インドネシアで起こった国際的な事件を扱った「楽園への長き道」に対し、「愛の徴」は世界のイスラム学の中心とされるエジプトを舞台にした恋愛映画である。主人公のインドネシア人青年ファフリはアル・アズハル大学で学び本場のイスラム教徒と互角にわたりあい、様々な宗教・国籍の人々に慕われる。イスラム教は出自に関わらず極めることができるものとして描かれ、エジプトが舞台であることには、世界中の人が集まるエキゾチックな土地という意味が与えられているだけである。そこ

では、正しいイスラム教徒であれば、インドネシア人であっても引け目を感じる必要はなく、世界人となりうる様が描かれる。

ではそのイスラム教とは何か。主人公はコーランをよく学び、イスラム教徒として善良で誰にでも親切で正しくあり、目上の人にも従順である。このように神に対して「正しい」ファフリは、しかし、自分を慕う女性の心を理解しなかったことで恨みを買ひ、トラブル（無実の罪で囚われの身となる）に巻き込まれることになる。妻アイシャ（ドイツ国籍のトルコ人イスラム教徒）の尽力によりトラブルから脱出するものの、その過程で、2人目の妻マリア（エジプト人コプト教徒）を迎えることになる。後半は、一つ屋根の下での2人の妻との暮らしに困惑しながら、自分の家族づくりに努めるファフリの様子が描かれる。

ここでは、神に対して清廉潔白であることと、生きている人々のあいだで公正であることは別のことであることが明示されている。また、ファフリがつくる家族は、国籍・宗教を異にするにもかかわらず、その違いが強調されていない点も興味深い。本作品からは、この世に生きる限り、神との関係を正しくするだけではだめで、人と人との関係に関心や犠牲を払いながら、自分の生きる場をつくることが重要であるとのメッセージが読み取れる。

ユドヨノ大統領が各国大使を招待しての特別上映会を催し、「インドネシア発のイスラム映画」と胸を張った背景には、この映画の持つこうしたメッセージが、インドネシアの目指すべき道をも示していたからのように思われる。